

(2) 創作の部

『Teen's Dream 大切なもの』

ー 2014年 4月

「今日からここが私の学校か……。」

目の前にそびえ立った九階建ての大きなビルは、どう見ても十五歳の少女がこれから通うことになる「高校」と呼ばれる場所には見えなかった。ここには、クラスも、部活動も、テスト期間も体育祭もない。強いて言えば、ほかの学校より少しだけかわいらしく、極端に短いスカートの制服くらいなものである。

きっとこの日本には、このような一風変わった高校もたくさんあるのだろう。そこに集まる十代の若く輝くパワーは時に、奇跡を起こす可能性さえも秘めている。

春の柔らかな陽射しの中、まだあどけなさの残る白く透き通るような顔を、薄い化粧と、丁寧に巻かれた黒髪で覆った少女は、のちに自分がかつた奇跡の一員となることをまだ知らない。

ふいに吹いた風が、近くの公園から桜の花びらを運んできた。

高原ゆきの、華の高校生活の始まりを祝福するかのよう。

大阪スクーロブミュージック高等専修学校。「こんな長い学校名めんどくさい。」と生徒たちはよく口にする。通称はOSM。

この学校に通う生徒は皆、総合音楽科という学科に属し、日々歌や楽器、ダンス、演技といったエンターテインメント業界を目指した勉強をしている。高校生として最低限の普通科目と、専門的なことを学ぶ色とりどりの授業や、実際に学校外へと発信していく活動をする「プロジェクト」の中から自分で履修したいものを選んで時間割を作成するのだ。

ゆきもこの魅力的な授業の数々から自分が選ぶべきものを迷い、悩みながらも十五コマを何とか厳選することができた。

この学校は何もかもが普通の学校とは違う。

四月も後半戦へと突入した頃にやっと大阪城ホールでの華やかな入学式を終え、待望の授業が始まった時には、ゴールデンウィークがもう一週間後にまで迫っていた。

「どこや……どこやここお……。」

校舎は大阪スクーロブミュージック専門学校、大阪ダンスアンドアクターズ専門学校と三校で共用のため恐ろしく広い……というよりは、ばかどかい、と表現した方が適切かもしれない。とにかく、毎年多くの新入生がこの迷宮に迷い込み、移動教室はとても厄介なミッションとなる。

時刻は十三時十六分。三限目の一年生ヴォーカルゼミの授業が始まるまで、あと五分を切ったところだ。ゆきは高校生活初日から最大のピンチに見舞われていた。

「EN531? なんやねんこの暗号みたいな教室名……たしか第三校舎って先生言うてた気がしてんだけど……あと四分でたどり着ける距離にあるのかな……?」

OSMの第三校舎は本校舎とは繋がっていない。そのため一旦外に出なければならぬのだ。本校舎と総合校舎の間の非常階段で五階を探してさまよっているゆきが辿り着くにはまだまだ時間がかかりそうである。

ちなみにこの学校のチャイムはなぜか定刻より二分早くなるらしい。もちろん、入学したてのゆきがそんなことを知る由もないのだが。「なあ! ゆきちゃん……やんな? もしかしてヴォーカルゼミの教室探してたりする?」

突然後ろから声をかけてきたのはゆきと同じヴォーカルコース一年の桐本絢である。春休みの間に行われていたガイダンスやレベルチェックが一緒だったので何度か顔を合わせたことはあったが、直接声をかけられたのは初めてだ。

すらりと伸びた手足、明るい茶色に染められた髪の毛、はっきりとした目鼻立ちに濃いメイクはいかにも「都会の女の子」といった印象を与える。小柄でどちらかというと地味なタイプのゆきには彼女が眩しく見える反面、怖いからなるべく関わらないようにしておきたいタイプの同級生だ。

ただでさえ人見知りの激しいゆきが困惑していると、絢が続けて話し始めた。

「さっき先輩に聞いてんだけどな、531ってここの校舎じゃないらしいで! 一回外に出なあかんねんて!」

「あ、そうなんや……」

自分もさつさと人に聞くべきだったなと、ゆきは少しだけ自分が情けなく思えた。しかしすぐさま自分が今陥っているピンチを思い出し、とりあえず今回は絢の存在に感謝した。

「さ、行こつ! 遅刻すんで!」

「うん……あ、ありがとう!」

二人は階段を一番下まで駆け降りてドアを開けた。

「あれ!? ここのしかして図書室とかあるとこちやう?」

「ほんまや……あ、あそこから外に出られる……!」

ゆきが指差した自動ドアからは、二人と同じように時間に追われているのだろうか、何人かの生徒が息を切らしながら駆け込んできく。

「あはは……あたしが入ってきた正面玄関がどこかもわからへん! ほんま迷路みたいやな、この学校。」

「うん。こんななんいつになったら覚えられるんやろ……」

ゆきはこれからしばらくの間、教室移動のたびに迷子になる自分を想像し、気が滅入りそうになった。

「あ、ほんならさ、あとで一緒に学校探検せーへん？ 五限空いてる？」

「空いてる……空いてるで！」

驚いた。自分がこんなにも正反対なタイプの絢と授業以外で会う約束を交わすなんて。

そう、中学校までは「悪い生徒」の象徴だと思い込まされていた明るい髪の毛も、短すぎるスカートも、耳元に光る色とりどりのピアスも、校則のないこの高校では自分を表現するための大切な個性だ。

ゆきは今まで絢に対して偏見を持っていたことを心の中で謝り、そして、この人のことをもっと知りたい、もっと仲良くなりたいと思った。

気が付けば二人はずっと前からそうしていたかのように笑い合っていた。これが友達になった、という感覚なのだろうか。ゆきにとつてOSMに来て初めての友達だ。

これから三年間、いっただれだけたくさんの思い出ができるのだろう。

辛いことも苦しいことも、絢と一緒にならきつと乗り越えられる。ゆきは不思議とそんな風に感じていた。

しかし、そんな二人をよそにチャイムが無情にも鳴り響いた。

「あ、やばい！ 走るで！」

暖かな春の陽気は、二人の胸の高鳴りを希望へと変えていったのだった。

□ 1945年 3月

三月に入り昼間はもうすっかり春の暖かさだが、やはり夜は冷え込む。羽織りを着てくるべきだったかと、神田ハルは少しだけ後悔した。しかし今日はどうしても引き返す気になれなかった。なにしろ今日は久しぶりに満天の星空が頭上に広がっているのだ。

一秒でも長くこの外の世界に包まれていたい。そんな心の高ぶりからか、冷たい空気に触れたせいか、ハルの健康的な小麦色の頬は心なしか紅潮していた。

それに、今帰ってもし母が起きてしまったらまた叱られる。一日に二度も叱られるのはごめんだ。

「いいや、このくらい寒くなんかない。」

ハルはそう踏ん切り、すっかり寝静まった街を抜け出して裏山へと向かっていった。

外灯のない山道は闇に染まり、まるで自分一人だけがこの世に取り残されてしまっているかのように錯覚する。心細いが、いつそ自分もこの闇に溶けてしまえたらどれほど幸せだろうと、ハルはふと考える。

しばらく歩いていると、次第に目と耳が闇の世界と思っていた環境に慣れてきた。ひとつずつ神様が世界を返してくれるように、小動物の気配や、周りを取り囲んでいる木々や風の匂いなんかハルの体を通り過ぎていく。

突然、視界が開け、天と地の境界線すらもわからなくなるほど、見渡す限り星しかない場所に出た。山のとある一角。ハルのお気に入りの場所だ。

「よし。ここまで来たらもう誰にも聞かれへん。」

夜の冷たい空気が、ハルの体を伝って静かに震えだす。少女の澄み切った素朴な歌声が響き渡った。森は、まるでその歌声を自らの一部として受け入れているかのようだ。

ここには自分を拒むものは何もない。ハルは心の底から歌うことを楽しんだ。

「ふう、やっぱり気持ちいい……！」

そう呟いて芝生の上に寝転がると、昼間の母とのやり取りが脳裏に浮かんだ。

——「ハル！ いいかげんにしなさい！ お隣に聞こえるやろ？」

——「歌うくらいええやんか！ 別に遊んでるわけちゃうし、ちゃんと仕事してるやろ？」

——「外から聞いてたら遊んでるんと一緒や。この辺じやうちだけやで？ 家から誰も戦争に行っていないの。お願いやから呑気にせんといて。」

——「……そんなん私には関係ない！！ 母さんは、父さんが病氣じゃなくて戦争で死ねばよかったって思ってるん！？」

本当はわかっている。母がそんなこと思うはずがないことも、自分が悪かったことも。

この大きな街で母とたった二人、いろいろな人に支えられて生きている立场上、自分たちはおとなしく慎ましく生活しておくべきなのだろう。しかし頭では分かっている、歌うことを咎められるとついカッとなってしまう。大好きなことを遊びだ呑気だなんて言われると、心が苦しかった。

すう……苦しくなった心に新しい空気を入れようと、ハルは大きく深呼吸をした。自分が今生きている世界の空気を、胸いっぱい吸い込んだ。森のざわめきも、天に散りばめられた星屑たちも、自分を連れ去ってはくれない闇や、母との口

喧嘩の嫌な思いでさえも、全部がそこにあつてこそ、大切な今を生きている世界なのだ。心の靄が完全に晴れたわけではなかったが、自分にそう言い聞かせると少しだけ落ち着くような気がした。

その時、街で鳴り響いているけたましい警報音がハルの耳に届いた。

空襲警報だ。ハルが慌てて判断し、木の陰まで逃げ込んで行っている間にも、バリバリと大きな音をたてて無数の飛行機が上空を通過していく。

「街の方へ向かつてる！ 母さん！」

ハルは走りだそうとしたのに、足が竦んで動けない。

たった一人の大切な家族よりも、自分の命の方が心配なのかと、自分が悔しくて、憎らしくて、何度もその震える腿を抓った。

「動け……動け……走れ！」

突然、夜だというのに空が昼間のように明るくなった。眼下に広がる大阪の街に降り注いでいるのは雨でも、流れ星でもない。炎だ。結局ハルは、一晩中その場で泣きながら祈ることしかできなかった。

どれだけの時間そうしていたのだろうか。気が付いた時にはもう、目の前に広がっていた景色は変わり果ててしまっていた。街は赤い色で覆われ、灰色の煙が立ち籠めている。この世のものとは思えないその光景に、ハルは驚愕した。

次第に東の空から陽が射し始め、青空が見えてきたことで少しだけ勇気が出た。

ハルは立ち上がり一歩ずつ山を下りていく。

家ではいつものように母が寝ていて、起こしてしまわないようにこっそりと布団に潜る。そんないつも通りの朝を想像しながら、ゆっくりと街に向かつていく。

本当は今すぐにでも走り出したいのだが、拭いきれない不安が足取りを重くしていた。

やっとの思いで森を抜け、街への一歩目を踏み出した時、ハルは絶句した。

そこにあつたはずの街並みが跡形もなく消え去っているのだ。

しかし、ふと目線を下げて気が付いた。

街は消えたのではない。

恐る恐る歩き出したハルの目に飛び込んでくる景色はあまりにも残酷な現実だった。

見渡す限りの建物は燃えてなくなっている。人は、もうハルの知っている生きた人間の姿には見えなかった。炭のようになった者、人としての形を留めていない者、獣のように泣き叫ぶ者、亡者の如くさまよう者。

ぶつり、と自分の中で何かが切れる音がした。ハルもそんな人間の姿の一部になりつつあるのだろうか。しかし、変わり果てた街並みで、自分を見失いそうになりつつも、足は自然と家路を辿る。

あそこの曲がり角にあるはずの家はもうないのではないか、いいやそんなはずはない。そんな葛藤にハルの小さな心は押しつぶされそうだった。

祈るような気持ちで家の前に着くと、ハルは目を疑った。

隣家は灰とがれきになっているというのに、自分の家だけは、ハルを待ち構えていたというように堂々とそこに立っていたからである。祖父が生前に書いたという、表札の「神田」という文字が黒く光った。

ハルは溢れ出る涙を必死で堪えながら震える手で扉をひいた。

「ただいま、帰りました……！」

しかし、家の中から「お帰りなさい」が返ってくることはもう二度となかった。

≡ 2014年 6月

どうして人は人を平気で傷つけることができるの？

わたしが勝手に傷ついてるだけなのかな？

わたしもいつの間にか人を傷つけてたりするのかな？

これが人間の普通の生活なのかな？

でも、わたしにはもう無理だよ。

生きるということがこんなにも苦しいことなら、

いつそのこと死んでしまいたい。

そう思ってたんだ。あの日までは。

水無月、なんてよく言ったもんだ。毎日毎日雨ばかりで水ならいくらでもあるじゃないか。と、ゆきは思う。

梅雨。そう呼ばれる季節になった。

OSMに入學してから二か月が経ち、ゆきはもうすっかり「女子高生」という生活が板についてきた。絢や他の同級生たちのおかげもあ

って、学校内で迷子になることももうない。

「さて、雨もあがったし今日も頑張ろっ。」

ゆきは最近、路上ライブの活動を始めた。今までは家で歌っているだけで十分だったのだが、もう少し人前で歌う度胸を身に着けたい、と思ったことがきっかけである。路上ライブ……とは言うものの、ゆきがいつも歌う場所は、公園の遊具から少し離れた所にある桜並木のふもとのベンチの前、と決めているので正確には路上ではない。人通りが多いわけでもないので立ち止って聞いてくれる人もほとんどいない。

初めての路上ライブの日、ゆきは絢と二人でこの場所に決めた。どうしてもここがいいと言った絢の歌声は、少し不安定だが繊細で綺麗だとゆきは思った。

そういえばあの日以来、絢とは一緒に歌っていない気がする。今日も誘ってみたのだが、バイトがあると断られてしまった。

ゆきはギターを抱え、華奢な見た目とは裏腹な力強い歌声で周りの空気を思いつきり震わせる。その間だけは、自分がなにか違う生き物になれるような気がしていた。

幼い頃からずっとそうだった。幼稚園ではおとなしくて控えめな性格だったにも関わらず、みんなと遊ばないの？ と聞かれると、お絵かきやおままごとなんかよりも、お歌が歌いたい！ と言ってきかなかったという。

小学生の頃には兄が好きだった歌手のライブに、わがままを言って連れて行ってもらったことがある。ゆきのそれまでの人生で見たことのないほど大きな空間、聞いたこともないほど大きな歓声、テレビで見えるよりもずっと小さく見える女性シンガーの圧倒的な存在感、初めて知ったプロの歌声、シンガーソングライターという職業。自分もこんな大人になるのかな、と思ったことを今でも鮮明に覚えている。

あの日から、ゆきの夢は「歌手になること」だった。小学校の卒業文集にも、中学校の卒業文集にもそう書いてある。しかし、本当にそうなのだろうか。

実をいうと、ゆきは最近、自分が歌を職業にすることを指すのに、少しばかりの疑問を抱くようになったのである。

歌を本格的に勉強し始めてまだたったの二か月だが、毎日毎日歌のことだけを考えて生活している。日々の授業で、あなたはもったこんな風に歌った方がいいだの、パフォーマン스가どうこうだのといったアドバイスをもらっては、自分なりに考えて努力しているつもりではいたが、そうするたびに、どこか自分の歌いたい歌から離れていく気がしているのだ。

もちろん歌うことは相変わらず大好きで、これからはもっと多くの人に自分の聞いてもらいたいと思う。

それなのに、小さな心のわだかまりは、解けることなく渦をまいているのだった。

一生楽しく歌っていられるのなら、自分の真意に反した歌を歌ってまでお金を稼ごうなんて考える必要は無いのかもしれない……と。いつの間にか、ゆきは歌うのをやめてベンチに座り込んでいた。

考えても結論が出ないのなら、今はひたすらに歌おうと思いまた立ち上がった時、かさつ、と近くで物音がした。顔を上げるとそこには女の子が立っていた。中学生だろうか。しかしどこか様子がおかしい。彼女は濡れているのだ。

「あ、雨に濡れたん……？」

ゆきは慌ててカバンの中から何か体を拭けるものを探そうとしてハッとした。確かに今朝は雨が降っていたが、学校に向かう頃には止み今日はずっと、久しぶりの快晴だったのだ。

もう一度顔を上げた。目の前にいる女の子の、一部が不自然に短くなった髪の毛の先から、大きな茶色のシミが付いたセーラー服の裾から、水滴がぼろぼろと落ちていく。その雫が夕焼けに反射して鮮やかに輝いていたので、ゆきは綺麗だと思った。

しかしその考えはあまりにも不謹慎だった。

女の子の血の気がなく今にも消えてしまいそうな表情がゆがんだ。泣いているのだ、とゆきが判断できるまで時間はかからなかった。

「えっと……あの、これ、よかったら使って！」

ゆきはやつと見つけたお気に入りのピンク色のタオルを差し出した。

女の子は泣きながら驚いたような表情を見せ、それを受け取った。そして深く頭を下げた。

「それ、そんなええもんちゃうけど、あげるから。何があったんかわたしにはわからへんけど、そんなに泣かんといて……！ 可愛い顔し
てんのに、もったいないで……！」

なんと言えれば良かったのかゆきにはわからなかったが、とにかく目の前にいる女の子に元気になってもらいたくて必死だった。すると女の子は照れるような笑みを浮かべ、その場から走り去ってしまった。

今の女の子はいったいなんだったのだろうか。いつからそこにいたのだろうか。

「もしかして、わたしの歌、聴いてくれてたのかなあ……？」

そう思うと、胸の鼓動が大きくなるのを感じた。もしそうだとしたら……まだしばらくはここで歌っていようかな……。

Ⅶ 1945年 5月

その日は清々しい五月晴れだったという。この晴れ渡った青空のように広く無垢な心を持った人間に育つように。そんな願いが「ハル」という名前には込められている。

「母さん、辛いことも多いけど、私は元気にやってるで。生んでくれてありがとう。」

きつとその日と同じであろう五月晴れの空に向かい、ハルは絞り出すような声で強がった。

しかし、ハルの世界には色がなくなつたようだった。

母はまだ見つかつていない。あの日、夜中に家を抜け出した自分のことを心配して夜の街を走り回つたりしていたのだろうか。もしそうだとしたら、こうなつたのは自分のせいだ。ハルは喪失感と自責の念に駆られ、家に帰るのが億劫な毎日である。

仕事が終わりの今日は、軽く汗ばむ陽射しの中をいつもの山道を辿っていた。

早く歌いたい。今は歌だけが自分の味方なのだ。どんなに辛く悲しくても、そばに歌があれば気持ち明るくなれる。いつか自分が作つた歌が誰かの味方になる、なんてことができればどれほど幸せだろうと、ハルは最近詩を書いては、小さな缶に入れて大切にしている。今日は裏山で書こうとその小さな缶とすっかり短くなつた鉛筆を握りしめてきた。

ふいに、ハルの目の前を白く輝くものが横切つた。

「鳥？ あんなん初めて見た……。綺麗……。」

その白く輝く生き物は、ハルの頭上をふわふわと一周飛んだ後、ゆっくり横道へと逸れていく。ハルはその生き物の持つ不思議な力に導かれるように、無心にその後を追いかけていった。

深い草むらを抜け少し開けた場所に着いた時、その姿はもう見えなくなっていた。そして代わりに目の前に現れたのは、小さな洞窟だ。

「あれ？ こんなところに……防空壕やろか？」

中に入ってみると、内側には石が積み重ねられている個所もあり、明らかに人が作つた物のようだったが、そこら中に苔が生えていて、長い間、人が出入りしたような形跡はない。

ハルはこの場所が一目で気に入った。いつもの場所の方が見晴らしはいいが、ここなら屋根がある。石で机と椅子を作ろうかな、雑草もしっかり片づけて……あ、帰りはここに来るまでの道をつけて帰らなつ。と久しぶりに心が弾んだ。

そして、出来たばかりの小さな机に向かい、ハルは早速新しい詩を考え始めた。

果てなく広がる藍色は

心までを深く染め

夜空に煌めく星屑は

すべてを吸い込んでゆく

強く生きること

この大空に誓おう

世界はなにでできているのだろう

どんな言葉を紡いだなら

あなたに届けることが出来るか

知りたい

この夢が果てるまで

世界はなにでできているのだろう

未来に残すべき世界を

私に変えることができるなら

いつまでも歌い続けよう

白黒だったハルの世界に少しだけ、また色が見え始めた気がした。

今はこんな生活だけど、いつか絶対に終わるはず。戦争が終わったら、学校に行きたい。そしていろんな世界を知って、たくさん言葉覚えて、人前で胸を張って歌える歌を歌おう。その時が来るまで、私の歌も夢も、ここに隠しておこう。

ハルは缶を机の下に置き、来た時のように深い草むらをかき分け、踏みしめながら家へと帰って行った。

△ 2014年 7月

天才。という存在はこの世に案外いるのかもしれない。

初めて彼女を見かけた時から私はその歌声の虜になった。

彼女はいつもあの桜の木の前で、音楽に詳しくない私でも知っているような歌を、他では聴いたことがないほどの力強さと真っ直ぐさで無邪気に歌う。

家までは少し遠回りになるが、公園の中を通って彼女が歌っていないか探しながら帰るのがいつの間にか日課になっていた。

いつか、彼女の紡ぐ言葉とメロディも聴いてみたいものだ。

そんなことを考えながら、今日も満員電車で揺られて家路につく。

学校から一步外に踏み出した瞬間、地獄のような熱気に覆われ、蟬の鳴き声が耳を劈く。

ゆきは二限で授業が終わったので、真昼の暑さと空腹と闘いながら歩き出した。

「暑い……まだ七月とかありえへん……」

名は体を表す、というようにゆきは暑さが苦手だ。

十六年前、十二月のある日、ふわふわと舞う……なんて可愛げな表現では表せないほどの雪、吹雪が大阪にもやってきたという。その光景がゆきの母にはとても綺麗に見えたらしく、雪のように綺麗で純白の心を持った子に育ってほしいという願いがゆきという名前には込められている。

母の感性は謎だが、あえて平仮名でつけられた「ゆき」という名前は見た目も響きも可愛らしいので気に入っている。いつか純白の雪景色を目の前に見る機会があれば、ゆきにも母の気持ちがかかるのだろうか。

まだ見ぬ雪に覆われた世界を想像していると、心なしか涼しくなった気がした。雪景色、すごい！なんてゆきは一人感動に浸っているが、涼しくなったのは冷房の効いた電車に乗り込んだからである。ゆきの思考回路も十分ファンタジックだった。

この時間に家に帰っても一人なので朝食の残りのおかずを手短に食べ、その後ゆきは珍しく机に向かった。今日のゆきは追い詰められているのだ。

実は、明日提出予定の作詞の課題が全くもって進んでいないのである。

「どうしよう……。こんなん何書いたらいいんかわからへん。」

いつか自分の歌を歌いたい！と思っていたはずなのに、いざ作るとなると想像以上に難しかった。授業中いつも隣ですらすらと書きあげていく絢が羨ましい。ゆきは歌うことには自信があるのだが……やっぱり自分には向いていないのではないかと内心落ち込んでいる。せっかく路上ライブで立ち止まって聴いてくれるお客さんも増えてきたというのに。

先月頃から、ゆきがあの公園で歌うたびに聴きに來てくれる女性がいる。いつもばきとした黒のパンツスーツに黒縁メガネがとても知的な印象でかっこいいお姉さんだ。仕事帰りなのだろうか、毎回少し疲れた顔でやってくるのだが、帰り際には必ず笑顔で声をかけてくれる。

あのお姉さんにもついこの間、「いつかあなたの言葉で、あなたが作った曲を聴いてみたいな。」と言われたところだった。

一時間ほどノートとにらめっこした挙句、ゆきは投げ出した。

「もう無理や。気分転換行こ。」

歌いに行こうかとも思ったが、この時間だといつもの公園は子供たちで賑わっていて歌うにはまだ早い……。

そうだ、隣町にはもつと大きな公園がある。ゆきは行ったことがなかったが、父が時々散歩に行つては「自然の中にと、心が洗われるぞ。」なんてことを言っていた。自転車で行けば二十分ほどで着くらしい。

ゆきは兄の自転車をこっそりと借りて漕ぎ出した。

「公園、どこ……？　ここは……ただの森やんな？」

木々に囲まれた山道は陽射しこそ遮られているが、急な坂道のせいでゆきは汗だくになっていた。

しかし、ゆきはそんな状況でも案外楽しんでた。大阪にもこんな自然があったのか、と意外な発見に心が弾む。自然の中にと心が洗われる、という父の言葉も間違つてはいなかったようだ。時間はまだあるのだから、もう少し迷ってみよう。いざとなったら携帯もあるし、なんとかなる。

ふいに、目の前を白く光るものが横切つた。

「天使？　あ、ビニールかな。」

そして、ばさつ、と大きく羽ばたく音がした。先ほどの白く輝く生き物はどうやら鳥だったようだ。ゆきの頭の上を一周大きく回つた後、ゆつくりと横に逸れていく。

ゆきは自転車を道端に停め、導かれるように草むらへと入っていった。

視線を上に向けながら、ゆきの背丈ほどもある草をかき分けて進むと開けた場所に出た。そこには小さな洞窟があり、いつの間にか先ほどの鳥はいなくなっていた。

「これは、防空壕……とかいうやつなんかな？」

中学校の社会の教科書に載っていた写真を見たことはあったが、実物を見たのはもちろん初めてである。足を踏み入れてみると、中には大きめの石がいくつか転がっているだけで他には何もなかった。

空が曇りはじめ、外が少し暗くなってきた。

ゆきはこの場所にいることが急に怖くなり、帰ろうとして足元にあった石につまずいた。するとその下で何かが鈍く光ったのが目に入った。石をよけてみると、円柱型の小さな缶が半分土に埋まっていた。ゆきはその缶を手に取り、恐る恐る開けてみる。入っていたのは小さく折りたたまれた古ぼけた紙と、短い鉛筆だった。

「大切なもの……？」

その紙はどうやら誰かが書いた詩のようだった。端には小さく「ハル」と書かれている。この詩の作者の名前だろうか。不思議に見入っていたゆきは突然、メロディを口ずさみ始めた。いや、どちらかというとメロディがゆきの口を使ってそこに姿を現した、

という感覚だ。

「え？ わたし、今作曲したんちゃう？」

早く帰って今のメロディの曲を作ってみよう。そう思いついたゆきは、自転車を置いたところまで走って戻り、そこから猛スピードで坂道を下りて行ったのだった。

1945年 8月

この日、ハルはいつもより少しだけ早く目が覚めた。

まだ太陽も昇っておらず、大阪の街は大半が眠っている。

広い家にたった一人ぼっちの生活にもすっかり慣れてしまった。

この家に生まれ、祖父と、父と母と、四人で暮らしていた幸せな日々が遙か昔のことようだ……。

父は生まれつき体が弱かったが、当時身寄りのなかった母と出会い、結婚し、見違えるように元気になっていったと聞いたことがある。

ハルが物心ついた頃には病気でこの世を去ってしまっていたので、父との思い出はほとんどないのだが、きっと優しくて温かい人だったんだろうなと、生前の父の写真を見ながら心の中にその姿を思い描く。

祖父はそんな父に代わって、ハルを愛情のこもった厳しさで育ててくれた。幼い頃はただ怖い存在だったが、成長するにつれてその意味を理解し、祖父にはとても感謝するようになった。しかし、あんなにも大きかった祖父の存在感もある時から年を重ねるにつれて小さくなっていき、しまいには子供のように穏やかな寝顔で息を引き取った時には、心の底から悲しみが溢れた。

そして母と二人暮らしになってからの三年間は、喧嘩をすることも多かったがお互いに支え合って必死に生きてきた。母がいない生活なんて想像もできなかった。

しかし現に今こうしてハルは一人で生きている。今日も一人分の家事はあつという間に終わってしまった。

「早くそっちに行きたいと思うこともあるけれど、私はこの世界できっと夢を叶えるで。父さん、母さん、じいちゃん、そこからしっかり見といてな。」

ハルは仏壇に手を合わせ、大好きな家族に話しかけた。

「いってきます。」

家の外に出ると、大きな入道雲がこの季節を象徴していた。

ハルはこの季節が好きだ。開放的で、長い時間お天道様を拝んでいることができる。次はこの気持ちを歌にしてみよう。

そういえばあの日以来、防空壕には何度訪れようとしても辿り着けない。夢だったのだろうか。しかし家の中をいくら探しても、お気に入りの缶と書きかけの「大切なもの」という詩が見つからないことが、夢ではなかった何よりの証拠だ。今日はどうしても詩を書きたい気分なので、帰ったらまた裏山に行ってもう一度探してみよう。

仕事が終わったらすることができたので、駅に向かうハルの足取りは軽くなっていった。

ふとハルが額に滲み始めた汗を拭おうとしたその時、空襲警報が鳴る間もなく飛行機の音が聞こえてきた。後ろを振り向くと、遠くから無数の飛行機がこっちに向かっていている。ハルは頭が真っ白になり、もうどちらの方向に逃げればよいのかもわからなかった。持ち歩いていた防空頭巾を頭にかぶり、とにかくひたすらに走り出した。しかし、どれだけ必死に走っても、飛行機がどんどん迫ってくるのを背に感じていた。

そしてついに、周りを走っていた人々がばたばたと倒れていく。

道端の建物が次々に崩れていく。

ハルの後ろで何かが爆発したような音が鳴り、熱気が伝わってきた。

四方八方で人が悲鳴を上げては消えていく。

もう逃げ場がない。

そう思った瞬間、ハルの体が大きく宙に浮いた。

足元に転がっていた死体にもつまずいたのだろうか。

家族との思い出や、今までに見た綺麗な景色が走馬灯のように駆け巡る……。

しかし、ハルは最後の力を振り絞り走馬灯をかき消した。

「こんなところで死んでられへん！ 私には夢が……！！」

Ⅲ 2014年 9月

人が必死に努力して手に入れたものを、簡単に羨んではいけない。

これがあたしの持論。

だから、あたしはあたしで違う努力をすればええねん。

わかってる。わかってんねんけど。

やっぱりどうしても敵わない。

「才能」つてもんは生まれつき存在するんやって、最近つくづく思う。

そんなんと比べられて惨めな思いなんかしたくない。

だからたまには、あんたも……。

『Teen, s Dream Live』がいよいよ来月に迫ってきた。通称TDLと呼ばれるこのイベントは、主に各プロジェクトや授業の発表を中心に、有志での発表や生徒が企画した演目などもあり、二日間にも渡るOSM高等専修学校の一大イベントだ。

来る十月九日、十日がその記念すべき第一回目だという。

ゆきもヴォーカルゼミの発表でTDLに参加するため、六月ごろから少しずつ準備を進めてきたのだが、基本的には先輩方に任せっきりだったのはいまいち実感が湧いてこなかった。

今日は学校帰りに絢と衣装を買いに行く約束なので、いつものように三階教務室で待ち合わせをしていた。しかし、チャイムが鳴ってからそれなりの時間が経っているというのに絢はなかなか現れない。ダンスの授業が終わって着替えでもしているのだろうか。

「あ、ゆき！」

と声をかけてきたのは……絢ではなかった。担任の奥先生だ。

「あ、先生おはようございますー。」

「おはよー。ゆき、最近曲とか作ったりしてるんやろ？ TDL有志ヴォーカルとか出てみる気ない？」

「有志ヴォーカルですか……考えてみます。でも……私の曲はちよつと……。」

「えーなんで？ 大切なもの……やっけ、ゆきのあの曲めっちゃええのに！」

「あ、あれは……ありがとうございます……。」

またやってしまった。

ゆきはあの日、一晩で曲を作った。初めて曲を完成させることができたので、嬉しくて舞い上がってしまったのだらう。今となっては悔やんでも遅かった。

曲が出来た次の日の夜、ゆきは早速いつもの公園でライブをした。拾った歌詞を歌うことに多少の罪悪感があったものの、ちょっと歌ってみただけから……と大したことではないと思っていた。ところが、その「大切なもの」を歌い始めると、今までにないくらいの人ゆきの歌っている前に立ち止まっていったのだ。自分でも驚くほどに気持ちが悪かった。たかさんの人が声をかけていつてくれた。そしてつい、「この曲、初めてのオリジナルなんです！」などと口走ってしまったのだ。

その日以来、いつかハルという人物が「この詩を書いたのは私よ！」なんてゆきの前に現れる日が来るのではないかと、ゆきはこの曲を歌うたびに恐怖を感じていた。

こんなびくびくしながら歌なんて歌いたくない……TDLの有志には出たいけど、どうしよう……と考え込んでいると、やっと絢がやってきた。

「ゆき！ 待たせてごめん！」

「ううん。先生としゃべってたし全然大丈夫やでー。」

「ほな、いこかー？」

「あ、そうや絢！ 一緒にTDLの有志ヴォーカルにでーへん？」

絢と一緒に初めてのステージで緊張しても心強い上に、違う曲を歌う口実ができる、ゆきはそう考えた。きっと絢なら乗ってくれるだろうと。

「え、一緒に歌うん……？」

しかしゆきの予想に反し、なぜか絢の表情が曇った。

「なあ、やろーや！ 絢もゼミだけじゃ物足りひんやろ？ 二人で歌ったら絶対楽しいって！」

「……………。ほんなら、さ、ゆきの曲やろ。大切なもの。ゆきいつもギターの弾き語りやんか、だから今回はテイストを変えてあたしがキーボードを弾いてゆきが歌う。みたいなんとかどう？ あたしこれでもピアノ習ってたことあるし、たまには歌うだけやなくてそういうんもやってみたいな、とか思ってたん。ゆきの曲、あたしすごい好きやしせっかくならやりたい。」

ゆきは言葉を失った。絢に本当のことを話そうか。しかし本当のことを話して、最低なやつだと嫌われたくはない。絢の提案を拒む理由も見つけられず、ゆきはまた自分を裏切った。

「そうなんや！ 絢が鍵盤弾けるなんて知らなかったわ！ じゃあお言葉に甘えて、お願いしまーす！」

それからゆきと絢は本番までの期間、毎日二人で練習をした。実行委員会のビデオ審査も無事通過し、本番の出演時間も決まった。

もう後には引けなかった。
流れに任せて、路上ライブでも宣伝した。
もう、なるようになれ。

≡ 2014年 10月9日

OSM高等専修学校の新しいイベント『Teens Dream Live』が、OSMのライブスペース『LS-1』にてついに幕を開けた。

初日の今日はバンドやヒートビートタップ、アクティングプロジェクトといったバラエティ豊かな演目が続き、会場は予想以上の盛り上がりを見せている。

ただ今の演目は有志ヴォーカルの発表。有志ヴォーカルとは、コースや学年関係なくこのTDLのステージで歌いたいという生徒が歌える場である。もちろん、出たいと言えば誰でも出られるというわけではなく、数多くのエントリーの中からTDL実行委員会が事前に開催したオーディションに合格した全十組だけが、二日間の本番に振り分けられる。

「続いては有志ヴォーカル一日目、最後の発表になります！ トリを飾ってくれるのは、なんと一年生！ Yukiさんで、『大切なもの』です！ どうぞ！」

シンガーソングライターのYukiこと、高原ゆきが舞台上に登場すると会場からは盛大な拍手が沸き起こった。今日はTDL特別バージョンということで、いつものアコースティックギターは抱えていない。その代りに、ゆきの後ろでキーボードでの伴奏者として桐本絢がスタンバイしている。同級生たちだけではなく、ゆきのファンの期待の眼差しもところどころ客席からうかがえる。

ゆきと絢は一度顔を見合せアイコンタクトを取った後、絢がキーボードに手を乗せた。

曲のイントロが始まろうとしたその時、会場の前方、ステージと客席の間の観客は立ち入れないはずのスペースで、女の子が盛大に転んだ。転んだ……のだが、そもそも先ほどまでそんな場所に女の子など立っていなかったはずだ。彼女は一体何者なのだろう。突然の出来事に会場はどよめいている。

「いたっ！ うっ……早く立たな！ 後ろでなんか爆発しとったし熱っ……くない！？ え、ここどこ！？」

「さっきから何を騒いでいるんですか。そこ、入っちゃいけない場所ってわかりませんか？ もう、始まりますよ。とりあえず座ってください。」

戸惑っていた会場の雰囲気にしびれを切らしたのか、最前列にいた黒縁メガネの女性が女の子に声をかけ自分の席の隣に座らせた。

「始まるってなになが……そんなことより、ここはどこでしょうか!？」

「どこって、OSMの、LS・1だけだ。」

ステージ上のゆきはアクシデントに動揺したのか不安そうな表情をしているが、反対に絢は淡々イントロ奏でている。

大きく息を吸い込み、ゆきが歌い始めた。表情は少し硬くいつもの力強さが足りない気がするが、それでもゆきの歌声は圧倒的だった。

会場の人間全員が聞き入っている。

先ほどの女の子も今は大人しく、よほど感動したのか目を丸く見開いている。

無事歌い終えたゆきはやつと少しだけほっとしたような表情を見せ、盛大な歓声に包まれながらもなぜか逃げるように舞台上を去ろうとした。

「待って!」

突然、女の子がまた立ち上がり、あろうことか今度はステージに上がっていく。

「あなたの歌、ほんまに素敵やったで。やけど……どうしてそんな顔するん? 歌ことが好きやないの?」

「え……?」

「あ、ごめんなさい! 私、あなたが誰なんかも、なんで私の詩を歌ってるんかも知らんねんけど、なんでか、どうしても気になって!」

ゆきの表情が凍った。

そしてゆつくりと口を開き、震える声で答えた。

「歌は好き……でも、歌ってる自分がどうしても好きになれへん……。」

「あんな素敵に歌えるのになんでそんなこと……!」

すると突然絢が突然立ち上がった。

「もう! なんなんあんたさつきから! ゆきの歌はな、ほんまはこんなもんちゃうねんで! もっともっとすごいんやから、あんたなん

かが何も知らんと口出しせんといて!」

と、今にも泣きだしそうな顔で絢は叫んだ。

「絢、いいの! 聞いて、実は——」

「いいって何が!? ゆき最近変わったで。前はもっと歌うことに食欲やったやん!」

「……。そろそろ、本当のことを話すわ……。ここにはいつも路上ライブ見に来てくれる人たちもいるし……。みなさん、聞いてください。」

ゆきは震える手でマイクをぎゅっと握りしめ、話し始めた。

「わたしは、小さい頃からとにかく歌が大好きで、ずっと歌って過ごせる生活に憧れてここ、OSMに来ました。やけど、毎日毎日どうやったら上手く歌えるようになれるかだとか、そんなことばかり考えて悩む生活はなんか……自分の憧れていた生活とは、少し違っていました。歌手になりたいという夢も、嘘ではなかったはずなのに、いつの間にかもやもやした気持ちでいっぱいになってました。」

「ゆき……。」

ゆきは一度、涙を隠すように大きく深呼吸をした。

そして次の瞬間、何かを決心したような目つきに変わった。

「そんな時、森で迷子になって、防空壕？　みたいな所に辿り着いたんです。……そしてそこでわたしは詩を拾いました。そう……大切なものの歌詞です。だから実はこの曲は、私の曲やないんです！　本当にすみませんでした！」

「え……！　もしかして……。」

「ゆき……！」

「こんな私に歌う資格なんかありません。歌なんて大っ嫌い。今まで応援してくださって、ありがとうございました……。」

ゆきが客席から顔を背けて舞台から去っていくとする。

「そんなこと言わないで。私はあなたの歌声が好きよ。あなたのことが好きよ。それはあなたに何があるうと変わらない。これからだって、私はずっと応援していくつもりよ。ゆきちゃん。」

すると、その女性の発言に勇気付けられように、客席後方にいた、セーラー服の中学生も立ち上がった。

「わ、わたしも……応援、します。わたし、ゆきさんの歌に、命を救われました。あの日、ゆきさんがあの場所で歌ってなかったら、今のわたしはいないので……。」

意外だった二人の言葉にゆきは立ち止り、顔を上げると、絢と目が合った。

「ゆき……あたし、あんたの才能に……嫉妬しててん。だからゆきの努力してる姿も、何かに悩んでる姿も、見て見ぬふりしてたんやと思う。今回のTDLでも、せっかく一緒に歌おうって誘ってくれたのに、あたしが勝手に卑屈になって、あんな才能の塊と一緒に歌うなんて公開処刑以外の何物でもないやん！　とか思ってしまった……。友達なのに最低やなあたし。本当に、ごめん。こんなあたしやけど、今からでも、力になりたい……！」

「……絢。」

ステージ上で、皆の会話をずっと不思議そうに見つめていた女の子が、自分にも言い聞かせるかのように、二人に語りかけた。

「ここは、とっても素敵な世界やな……歌を聴いてくれる人がたくさんいて、歌が好きな人がたくさんいる……私……。」
次に続く言葉が見つからなかったのか、女の子は少し考え込んだ後、小さく息を吸いそっと歌い始めた。

大人の世界は正しいと
誰かが呟いた
だけど叶えたい夢は誰だつて
いつまでも心にある

女の子の透き通るような歌声に勇気をもらった絢が、キーボードに手をかけ、そして、ゆきに訴えかけるように、一緒に歌い始めた。

共に生きること
今あなたに誓おう

世界は何でできているのだろう
どんな言葉を紡いだなら
あなたに届けることが
知りたい
この夢が果てるまで

するといつの間にか、一人、また一人と、客席の同級生や客たちが立ち上がり共にゆきへ歌を届けようとはじめていた。
何かを悟ったような表情を見せた女の子が、今度は力強い言葉で、ゆきに言った。

「大丈夫。あなたの歌なら大丈夫や。こんなにもたくさんの人の心を動かせたんやから自信を持ってええんやで。私は、ずっと自分の歌を認めてもらえへんくて、夢を隠して生きてた。でも今日からは自分の夢に自信が持てそう。やからあんたも、この曲とか、自分の歌とか、恥じることなく一生懸命歌い続けて欲しい。」

世界はなにでできているのだろう
未来に残すべき世界を
私に変えることができるなら

いつまでも歌い続けよう

「やっと見つけたで。」

大切なもの

「……ありがとう。わたし、もう一回、正々堂々と頑張ってみる！」

「うん。ほな、またね。私、書きかけの詩があんねん。はよ帰って完成させな！」

そう言った目にはうっすらと涙を浮かべ、女の子はステージを下りて歩き出した。

「あ、待って、最後に名前——」

振り返り、微笑みを見せた女の子は、ゆきに聞こえるか聞こえないかくらいの声で小さく答え、去って行ってしまった。

LS・1に暖かな風が吹いた。